

技術と学問 - 君は何のために学ぶのか -

大橋秀雄

プロローグ：受験をひかえた親子の会話

母「あっ、また寝ている。勉強しなくちゃ駄目じゃない！」
子「お母さん、どうして勉強しなくちゃいけないの？」
母「ばかね、決まっているじゃない、いい大学に入れないわよ」
子「いい大学に入ったら、勉強しなくていいの？」
少し構えた母「駄目よ、いい会社に入るには勉強して成績上げなくちゃ」
子「いい会社に入ったら勉強しなくていいの？」
やけになった母「勉強続けないと、出世が遅れてお父さんみたいになっちゃうわよ」
それを聞いた父「勉強すれば出世できるなんて、世の中そんなに単純じゃないぞ！」
子「そうだよね、お父さん」
母「しまった、敵を二人にしちゃった」

いささかコミカルに会話が流れているが、何のために勉強するかという質問に、きちんと答えられる親がどれほどいるだろうか。勉強することを疑いない善として受け入れておきながら、それがほとんどの人にとって我慢を強いる苦行であるのは何故だろうか。入学や入社が体力で決まるとすると、運動嫌いがたくさん出るだろう。同じことで、学力をもっぱら競争の具として使えば、学ぶことの本質が歪められ、勉強嫌いがたくさん生まれるのも不思議でない。

学ぶ目的

学ぶ、勉強する、学問する、中身はみな同じで英語では learn である。その目的を会話の中でサラッと表現するのは、とても難しい。きちんと話そうとすると、どうしても解説調になってしまうが、私なら学ぶことの目的を次の二つに分けて説明するだろう。

- 自分で判断し、自分で考えて行動できる自立した個人に成長するため
- 職業を通じて、社会の中で信頼される役割を果たすため

第一の目的は、簡単にいってしまえば成熟した大人になることである。小さい頃から言葉を覚え、文字を習い、自分の外に広がる世界から知識を取り入れながら、だんだんと自分の判断で行動する自立した個体に成長してきた。この過程こそが、学ぶことの最も基本的な役割である。

自分の判断で行動するだけだったら、サルでやっている。ヒトがサルと違うのは、はるかに高度な自我をもっていることだろう。自分と外界（人間、社会、自然のすべて）との関係を知識と経験に基づいて整理し、自分なりに矛盾のない意識世界-自我-を構築する。それは、人生観、世界観などの様々な「観」としても表現されるが、学ぶこと、考えることを通じてそのような「観」を磨き上げてゆくことが、人間だけの営みである。一人の人間として成熟するために、学ぶことは欠かせない。このような学びを助ける教育を、人間教育と呼ぼう。

学ぶことの第二の目的は、社会の中に自分の役割をきちんと埋め込むことである。安定して信頼感のある社会を築くために、一人一人が専門性と責任感に裏付けられた特定の役割を果たすことが期待される。その役割こそが職業である。職業を担うためには、それに必要な知識・技能を修得する必要がある、そのための教育が職業教育である。

職業には様々な種類があるが、高度な知識の習得と訓練が必要な職業を専門職業 profession と呼んでいる。その代表として医師、弁護士などが先ず頭に浮かぶが、技術者もまた現代社会に欠かせない専門職業を担っている。専門職業に就くためには、高等教育レベルの専門教育が不可欠とされている。

教育機関の役割分担

学ぶことは個人の自発的な営為であるが、それを助ける場が学校などの教育機関である。人間教育のうち、読み書きそろばんから始まって、健全な社会生活を営むのに必要な知識の修得は、普通は初等・中等教育の段階で終了する。さらに高度な人間教育、「観」の形成に役立つような教育は、我が国では教養教育、欧米ではリベラルアーツと呼ばれており、高等教育の対象となっている。人間教育は、果てしのない高みへの挑戦でもあり、生涯にわたる継続教育が重要な役割を果たすことになる。

職業教育には、工業高校のような中等教育機関で完結するものもある。しかし専門職業のための教育は、大学の学部および大学院で分担されているが、そのやり方は専門により、国により違っている。アメリカでは、医学・法学・経営学などの専門職教育は大学院で集中的に行われており、学部教育の専門性は問題にしていない。技術者育成のための教育 engineering education に関しては、アメリカでも日本でも、学部では教養教育と専門基礎教育を混在させ、大学院で高度な専門教育を行うというやり方採っている。

専門職業を一生続けようと思えば、大学で教育を終えたあとでも、専門知識が陳腐化しないように不断にアップデートを続ける必要がある。これを継続専門能力開発 Continuing Professional Development, CPD と呼び、これからますます重要になってくる。CPD は専門職業を続ける上では必須であり、人間的熟成を目指す生涯教育とは目的が違っている。

学尊業卑

官尊民卑、男尊女卑のように尊と卑を対比させる四文字熟語はいろいろある。私は学尊業卑という新語を提案して、我々の意識に潜む固定観念をあぶり出したいと思っている。我が国では、それぞれの時代を通じて学問を尊ぶ気風が生き続けてきた。戦前全国の小学校の校庭に置かれていた二宮尊徳の銅像は、まさに学問こそ美德という教えの象徴であった。

これに比べると、「なりわい」に関わる「業」は、医者とか右筆とかの特殊な例を除けば卑賤なものとなされ、業を修得することは世過ぎ口過ぎの便法に過ぎないという意識が染み付いてきた。これは中国・韓国でも色濃く認められる意識で、東洋思想の伝統かもしれない。

学を究め悟りの境地に達した「聖者」がいたとしても、隔絶された山奥に潜んで世間との接触を断てば、社会的には存在しないと同じである。本を書く（著述業）、求めに応じて教える（教育業）ことがあれば、それは業を担うことを通じて社会的存在に変わる。業は糧を得る便法を超えて、自らの「尊」を賭ける営みそのものである。

学尊業卑の潜在意識は、日本の大学教育にも深い陰を落とし、専門職教育が軽視され続けてきた。Engineering education は、本来技術者を育成する専門職教育でありながら、対応する日本の工学教育は、技術に関わりの深い科学 - 工学 - を教えることに特化してきた。医学部は医学を教える場所ではなく、医業に従事する専門家 医師 を育成する場である。法学部は法学を教える場所ではなく、法曹に従事する専門家、弁護士や裁判官などを育成する場である。最近になってようやく意識が変わり始め、大学における専門職教育が段々と正当な位置を占めるようになってきた。このような方向転換は、ロースクールのような専門職大学院の具体化を突破口として今後ますます加速されてゆくだろう。

以上